

ありさの放送局

放射朗

さつきまであんなに切実に望んでいた土砂降りが、なんととも間の悪いことに、今頃になって降って来た。仰向けに倒れた俊夫のライムグリーンのポロシャツが濡れて黒っぽく変色していく。

苦しそうにしている俊夫の身体にあたしは自分の身体をかぶせて、少しでも俊夫が濡れないようにした。夏の雨だから、冷たくはないけど、素足にあたる水滴は痛いくらいだ。

そつだ、受信機。

俊夫がすぐく気にしていた黒いプラスチックの筆箱くらいの機械。

濡れたらきつと壊れてしまう。俊夫の右手からそれを無理やりもぎ取ると、あたしの胸元に移した。さつき付け替えられた細い伸び縮みアンテナがあたしの肩口から伸びてまるで俊夫の胸に矢が刺さっている

みたいに見えた。

救急車はまだ来ない。携帯で連絡してからすでに十五分が過ぎようとしているのに。

きつとこの土砂降りで道路が混雑しているんだ。

もどかしさが怒りに変わるころ、周囲の家から傘を持って人たちが数人寄ってきてあたし達をかばってくれた。口々に、大丈夫？ とか物騒ねえとか呟いている。

その頃になってやっとサイレンの音が聞こえ出した。ゆっくり近づいてくる。良かった。間に合ったみたいだ。

俊夫は激しく咳き込んでいた。街灯の光の中に黒い飛沫が飛ぶのも見えた。

心の底から土砂降りを望みながら家路をちんたら歩いていたのは、ほんの三十分前のことだった。夏の夜の空気は充分湿っぽかったし、天気予報でも夜半に局地的な雷雨の予報が出ていたのだ。

一気に降り注いであたしの身体をびしょ濡れにして欲しかった。

面白いことの何もない毎日に半分いらだちを覚えながら道端に落ちていた空き缶を思い切り蹴飛ばした。

悪友の澄子や香織とつるむのも厭きてきたところだったし、何より今の自分に嫌悪感を持ってしまふ。自分より弱いものをいじめるあたしは最低の人間だった。

自分の体が腐臭をあげているように思え、生理の日でもないのにパンツの中に指を入れて嗅いで見たりした。

そんなあたしの全身を、思い切りでつかい雨粒があたしの身体を叩き、何週間も風呂に入っていないホームレス男の垢のように何層にもこびりついたあたしの憎しみや悲しみ、嫌悪感を洗い流して欲しい。

そう願いながら歩いてきたのだ。

ゲーセンで暇をつぶしてから澄子たちと別れたのが九時過ぎ。

そして団地にはさまれた、暗くて細い道を歩いて、家まであと十分ほどという所まで来ていた。

そのとき、左手の小さな公園内で数人の争う声が聞こえてきたのだ。

放せ、それが要るんだと叫ぶ声は、よくあたしのグループがいじめている俊夫の声に妙に似ていた。

何も考えずにあたしはその場に向かった。

好奇心、それもあるけど、暴れたい衝動の方が強かった。

四人の男たちが喧嘩をしていた。一対三のようだ。喧嘩というより袋叩きだった。

倒れた一人は三人に蹴られながらも、何かを取り戻そうと、必死に喰らいついていた。

必死になって三人組の一人のジーンズに取りすがっている少年は、よく見るとやつぱり俊夫だった。

つい最近までは卑屈にあたしたちの使い走りをしてきた俊夫が今夜はやけに勇敢に不良たちに立ち向かっている。

ちよつと目を疑う光景だった。最近の俊夫がなんだか変わってきているのを思い出す。

そんな俊夫が必死になっているのを見ると、何だか加勢したくなってきた。

そして、第一に暴力の衝動が勝った。

「あんた達、卑怯じゃないの一人に三人がかりかよ」三人組は高校生のようだった。俊夫よりも頭ひとつ分背が高い。

やつとあたしの存在に気付いた三人組は、街灯の青っぽい光の中で、一瞬驚いた表情を浮かべたが、あたしが一人なのを確認すると、今度は舌なめずりでもするかのよう顔にやけさせた。

「こつちの方が何倍もおいしそうな獲物だぜ。自分から網にかかるなんて間抜けな獲物だ」

ラグビーでもやってるかのように腰周りの太い短髪
の男が木と針金でできたテレビのアンテナみたい
なものを地面に叩きつけて踏みじった。

「どこでやる？」

「あそこの公園の公衆便所でいいだろ、裸に剥いて後
ろと前にぶち込んでやるうぜ」

あとの二人がそんなことを言いながらあたしに逃
げられないように両側から挟み撃ちにしようとして
いる。

複数の敵を相手にするときには一番強そうなやつ
の足を狙って、まず動きを止める。父から教わった戦
闘の極意が自然と頭の中に蘇る。

あたしはすばやく踏み込むと五メートルほど先に
いたラグビー男に飛びげりを食らわせると見せかけ
て柔道の技、かにバサミで左足を狙った。

油断していたその男は一瞬の出来事にまるで対処
できずに、次の瞬間左足に深手を負った。骨は折れて
ないだろうけれど、靭帯損傷でしばらくは歩くのが苦痛
になったはずだ。

このやるうとか怒号があがる中、残りの二人の鼻を
正拳でつぶしてやり、ついでにラグビー野郎には裏拳
もお見舞いしてやった。

格闘技に長けていなかった三人は、その時点で戦意
を喪失して泣きながら逃げていった。

「俊夫、片付いたよ。俊夫が夜遊びするなんて、意外
だね」

のびて横たわってる俊夫の横にしゃがんで声をか
ける。

「受信機と、アンテナを……」

俊夫はまだ苦しそうだ。あたしに助けられたことを
不思議に思う余裕も無いらしい。

踏みつぶされたアンテナを拾い上げ、さらに奥の芝
生に転がっていたトランシーバーみたいな受信機を
探し出すと、急いで俊夫に手渡した。

「くそ。アンテナが壊れている。これじゃ、ありさの
居場所がわからない」

俊夫の震える手の中で折れたアンテナがカラカラ
と乾いた音を立てた。

気落ちしたせいかわ、座っていた俊夫は再び仰向けに
なつて荒い息をはいた。

さっきの蹴りは思つた以上に俊夫にダメージを与
えたのかもしれない。

ひよつとして内臓破裂とか？

救急車を呼ぶべきかしら。

「今……何時ごろ？」

俊夫の声は荒い息にさえぎられて途切れ途切れに出てきた。

十時十分だと答えると、俊夫は手に持っていた受信機のスイッチをひねった。

壊れたアンテナの代わりに、ポケットから別の細い伸び縮みアンテナを取り出してそれをつなげる。

受信機のスピーカーからは微かに雑音が聞こえるだけだった。

「何をしてるの？ ありさって誰？」

あたしの質問に答えるだけの余力は俊夫には残っていないようだった。

懸命に話したそうにしているが、唇が震えるだけだ。これはやばい。あたしは携帯電話を取り出すと、急いで一一九に電話した。

俊夫は苦痛の表情からうつろな表情に変わりつつあった。

待つ時間がすごく長く感じる。俊夫はこのまま死んでしまうのではないか。手足が不規則に震えだしている。右サイドへの蹴りだったから、肝臓が破裂してしまっただけかもしれない。

サイレンの音でやかましい中、あたしの胸元にある

受信機が、その時少女の声で歌いだした。雑音混じりの声を聞き取るために、あたしは受信機を耳に当てる。「鳩ぽっぽ」を歌い終わった少女は、やがて一人語りをはじめた。

「ありさは暗い押入れで泣いています。今夜はここで寝ないといけません。暑いよう。お父さんは帰ってこないし、帰ってこないお父さんにお母さんは文句言ってます」

なにこれ。訳がわかんない。少女は親に虐待を受けている様子を事細かに話して、そしてまた歌を歌うと終わりになった。

この放送は何なのだろう。ラジオ放送でもないし、電話の声とも違う。

いくら考えても結論は出ない。あたしはため息をついて考えるのをやめた。

救急車に乗るのは二度目だった。

一度目は、肺がん末期の父が、最後は家で死にたいからと言って帰っていた時だ。

どす黒い血を洗面器に激しく吐き出した父を見て、救急車を呼んだのだ。た。

看護婦をしている母は気丈にときばき処置していたけど、あたしは呆然としてしまっただけ泣いているだけ

だった。三年前の事だった。

俊夫の口元に装着された緑色の酸素チューブを見ていると、もう三年も経つのかとびっくりするくらい細部まで思い出されてきた。

父のやせ細った顔。無精ひげ。青白くてひび割れた皮膚に覆われた、まるで別人のような顔は、目だけがぎよろりとしていて、あれほど好きだったのに、あたしは怖くて近寄る事もできなかった。

枕もとに置いた洗面器に、牛乳瓶二本分くらいの黒っぽい血を吐いて泣く父の背中をさすってやる事さえ、怖くて出来なかった。

父に触ると、その病気がうつるような気がして、優しく背中をさする母を部屋の端から見つめるだけだった。

「もう駄目だ。楽になりたい……」

父の声はひび割れて、よく聞こえなかったけど、その部分だけはきちんと聞き取れた。

「しっかりして。紗江子が見てるのよ。あなたの一番弟子が見てるんだから、弱音ははかないで」

母の声は涙まじりで震えていた。畳の匂いに混じって鉄錆びのような血の匂いが部屋に拡散して、やがて充滿していく。蛍光灯のチラチラする青い光に、時折

蛾の当たる音がカツンカツンとやけに軽く響いていた。

あたしに気付いた父は、顔を上げると正面からあたしを見た。

赤く濡れた顎が光っていた。青い縞模様のパジャマは胸元が黒っぽく変色して汚かった。

「紗江子……ずっとそこに居たのか」
苦しい表情が一瞬消えて、父は嬉しそうにあたしを見た。

「居たのかじゃないわよ、ガタガタする音にびっくりして目がさめちゃった」

あたしは自分でも何を言ってるのかわからなかった。どうしていいかわからなかった。

恐怖で金縛りになっていた。
「フフ……子供の頃は蹴っ飛ばしても起きなかったのにな。でかくなりやがって」

でも、そつ言つ父の笑顔を見たら、あたしは父の側に行かずにいられなくなった。

その笑顔の中には元気だった頃の父の面影がはつきり見て取れたのだ。

「どうしてよ。どうしてタバコも吸わないお父さんが肺癆なんかにならなくちゃいけないの？ 強くて優しくっていつも人に親切にしていたお父さんが、こんな

に苦しい思いをしないといけないのよ」

父の身体は枯れ木のように硬くて軽々しかった。

父の肩を抱きしめたあたしの掌には、ごっごつした骨の感触しか帰ってこなかった。

「止める、血がつく」

父の顔に接触したあたしの頬を父ははらおうとするけど、思うように腕も動かないみだった。

サイレンの音が近づいたと思うと、呼び鈴のベルが鳴らされ、すぐに救急隊員が三人入ってきた。担架の上に移される父を見つめていると、父は一言あたしに向かつて言った。

いい子をたくさん生めよって。それが父の最後の言葉になった。

救急車には一緒に乗って行っただけど、父はその後すぐに意識が無くなってしまっていたから。

そして二日後に命の火が消えるまで、父はずっと意識不明だったから。

父の死はあたしにとって大げさじゃなく人生の転換点だった。

それまであたしは神様の存在をなんとなくだけ信じていて、悪い事をしたら必ずいつか神様の罰が与えられると素直に思っていた。

逆に考えれば、心正しく生きる者にはそれなりの幸福が約束されるはずだと思っていたのだ。でも、父の死でそれが嘘っぱちだとわかった。

厳しいけど優しくかった正義漢の父が、他人の吸ったタバコの副流煙でか何でかしらないけど、肺癌になってあれほど悲惨な最期を迎えたのだ。

心正しい正義の人も、悪の道に走った人も末路に変わりがないならば、無理して正義を貫く意味は何もないじゃない。

もし神様がいて、あの時あたしに気まぐれで意地悪をしたのなら、今から生涯かけて復讐してやる。運命にか神様にかわからないけど……。

その憎しみは怒りに変わって、それからというものあたしの心をずっと支配する事になったのだ。

あたしはそれまで父の言い付けで封印していた空手を、専守防衛以外にも使う事に決めた。というか、喧嘩するのって結構ストレス解消になるのだ。

父の死んだ悲しみが、やがて神様への怒りに変わったあたしは、歯向かう男も女も、拳と肘と膝で屈服させるのに暗い快感を覚え始めた。

夜のゲーセンとか、学校で不良を相手に暴れるのは実に楽しかった。

父の言い付けを破る事が父を裏切る事だと中学に

入る頃には気付いたけど、いったん火がついた暴力の衝動は止められなかった。

暴力をふるう度に、父を殺した神に対してほんの少し返しを果たした、そんな達成感があたしを今まで支えてきたのかもしれない。

今年になつてからは、澄子と香織と三人でよく俊夫をいじめていた。

喧嘩と違って、いじめは卑怯だという思いが少しはあつたけど、俊夫を見ているとなんだかイライラしてきて、ついやってしまうのだ。いじめられっ子って言うのは厳然と存在するのだ。

何かいつもおどおどしていて、嫌なことを命令されても卑屈に笑うだけで抵抗しない奴。

がつんつて抵抗されれば、いじめっ子だつて手を出さないものなのだ。

まあ、クラス全員でやる『無視いじめ』みたいな陰湿なのは誰彼お構いなしなのだろうけど、一対一か、一対数人のいじめは、いじめられっ子にも問題があると思う。

別に自分の責任を転嫁したいから言うのじゃないけど。

先々週は隣のクラスの雄大と組ませてセクハラいじめをやってみた。

澄子の発案だつたけど、まさか本当にやるとは思わなかつた。二人を組ませてボーイズラブをやらせようということになったのだ。

ボーイズラブって言うのは、美化されたホモのこと。なぜか女の子の雑誌なんかで流行っているのだ。

ホモ関係の載っていない少女雑誌なんて見たことがないくらい。香織の後輩たちが空けておいてくれたバレー部の部室は、女の汗の匂いでむっとしていた。鉄製のロッカー以外には、ボルトが緩んでがたがたするテーブルが一つと、灰色のパイプ椅子が三脚たたんであつた。そこに二人を連れ込んで脅したのだ。

「でも、どうすればいいのかわからないよ」

そう言うのが俊夫の精一杯の抵抗だった。

澄子が俊夫の腕を取って引く張る。

「ほらこつちに来て。まず一人じゃけんしなさいよ。負けた方が受けね」

受けというのが何を意味するのかもわからない二人は、とりあえず言われた通りにじゃんけんをした。

負けたのは俊夫だった。

「よし、じゃあ俊夫が受けだね。あんたズボンとパン

「脱ぎなさい」

澄子が命令する。

俊夫にもやっとな自分が何をされようとしているのか理解できてきたみたいだ。

俊夫の顔が赤くなり、一瞬だけ怒りの表情を見せた。しかしその感情は長続きしない。風に吹かれたタバコの煙みたいにすぐに消えてなくなった。殴られた時の痛みや、股間を思い切り蹴り上げられた時の苦痛と吐き気がよみがえり、俊夫の反抗心を雲散霧消させてしまふのだろう。

「早くしなよ、ぐずぐずした奴は鞭打ちだよ」

澄子が俊夫のベルトを外して二つ折りにすると、いったん緩めてすばやく引く。

緩んだベルトの皮がパシッと小気味よい音を立てた。

恐れをなした雄大はすばやくズボンを脱ぎ捨てると、パンツをずり下げた。

遅れないように俊夫もグンゼのパンツを脱ぎ捨てる。下半身がよく見えるようにワイシャツも脱がせて二人を並べてたたせた。うっすらと生えた陰毛の中に二人の物が縮こまっていた。

「らつきよが二つ並んでるみたいだね。俊夫、こっちにきて、このテーパールに手をつけてお尻を突き出しな

さい」

澄子の命令で俊夫はゆっくり動く。電池の切れかけたロボットのような。

薄汚れてぐらつくテーパールに両手をつけて俊夫は尻を後ろに突き出した。

俊夫の生白い尻が薄暗い中にぼんやり浮き上がる。「うふふ、どんな気分？ 普通は女の子がこうしてバツクから犯されるんだよね」

香織が俊夫のお尻をなでて、ぴしゃりと叩いた。

「そう言えばさ、三組の増田、バスケット部の男子にここで先週やられたんだってね。聞いた？」

香織は俊夫の後ろから俊夫の股間を刺激しながら話し出した。

あえてすんなり始めないで二人の恥ずかしい時間を長引かせているのだ。

「聞いたよ。五人の男子にまわされたんだって？ 一人目のときだけ抵抗したけど、あとの四人の時は自分から腰振ってたって言うじゃない。すました顔して優等生面してたけど、淫乱には変わりないって訳だね」
澄子は雄大の受け持ちだ。雄大のしぼんだペニスをもんだりしごいたりして何とか使い物になるようにしている。

「バックでがんがん突かれて、終わった時は五人分のミルクが膝の裏までたれていたらしいね」

こんな話をしたのは、その目的もあつたのだらう。雄大のものがぐんと元気になつてきていた。

「うう、止めてくれよ。お願いします」
雄大はまだそんなことを言つていた。

受けの俊夫の方はというと、硬くすばまった肛門に潤滑用のゼリーを塗られて、ジューズの瓶をゆるく入れられたりしていた。

口ではいやだと言いつつも雄大は結構気持ちよさそうにしている。実際痛い思いをするより気持ちいい事をしてもらう方が百倍もいい筈だ。

ああ……。雄大の断末魔は、彼のものが完全に固くなつてしまったことを物語つていた。

「じゃあ俊夫、お尻の力を緩めるのよ。自分から入れてもらおうとするほうが、けがしないからね」

澄子にお尻を叩かれて俊夫の首がぐんと垂れた。完全に諦めた様子だ。

雄大の丸々と太つた亀頭が、香織に導かれて俊夫のお尻の真中を狙う。

狙いを定めて後ろから香織と澄子が体重をかけて一気に押した。

ぎゃあと言う声は当然俊夫の悲鳴だ。澄子にマッサ―ジされてたけど、処女を失つのはさすがに痛いのだらう。

雄大は命令どおりに腰を自分から動かした。それにあわせてテーブルの軋む音が部屋の中に響く。

最初は二分の一拍子で、その後だんだん四分の一拍子になる。最後はエイトビートのロックのリズムで雄大は俊夫のお尻の中に溜まっていたミルクを思いつきり吐き出したのだ。

さすがに十六ビートまではいかなかった。まだまだ修行が足りないのかな。

ああいう場合つてどつちがより屈辱的なのだらう。無理やり犯される方も、もちろん嫌だらうけど、その気も無いのに女の手で勃起させられて、男の肛門にねじ込まれるのつて、むしろそつちの方が男にとつてはトラウマになるんじゃないだらうか。

そんなこと思つていたら、救急車が病院に到着した。目の前で俊夫が苦しんでいるというのに、あたしはこんなこと考えている。薄情を通り越して異常だよね本当。

病棟に運び込まれた俊夫は救急隊員の処置のおか

げか、ずいぶん楽そうになっていた。

なにより呼吸が安定している。暴行傷害事件という連絡が入っていたのだろう、待合室には警察官が二人いて、付き添っていたあたしは、おいでおいでと呼ばれてしまった。

いくつかの質問に答えてすぐに開放されたあたしは、受付ロビーの長椅子にとっしりと腰を下ろす。救急車の中でタオルをもらって、髪はふいたけどまだ制服が濡れていて気持ち悪かった。

そういえば今日、母は準夜勤だった。もう帰った後だけど、さっきまではここで仕事をしていたのだ。

今ごろ家であたしが居ないのを不審に思っとうろたえているかもしれない。

あたしはカバンの中から携帯電話を取り出すとモニターを眺めてみた。やっぱり、家からの着信が二件入っていた。救急車のサイレンで聞こえなかったのだ。家に電話すると母は驚いた様子で電話に出てきた。

あなたどこに居るの、こんなに遅くになって言われても、母さんが知らないだけなんだよ。

あたしは不良の紗江子なんだ。喧嘩じゃ負けたことないし、母さんが泊まりのときなんて夜中の二時まで駅前の繁華街をうろついたりした事もあるんだよ。

ウリとシンナーはやらないけどね。

口から出たがっているそんな言葉を飲み込んで、あたしは俊夫の暴行現場に偶然居合わせたこと、そして彼を救急車で母さんの勤めている病院に運んだ事を話した。

母は一応納得したみたい。すんだらすぐ帰ってらっしゃいって言われたけど、今日はここに泊まりたいと言ったあたしの答えに、じゃあ同僚に言っておくから仮眠室を貸してもらいなさいと言って、母は優しく電話を切った。

九時まで何してたのって聞かれなくて少しほっとした。

駅前ゲームセンターでの事がよみがえる。

「この間はケツサクだったよね。またあいつらホモらせようよ。今度は雄大を受けにさせよ」

「お釜掘らせるのもいいけど、シックスナインで互いのをしやぶらせるのも面白そうだよ。どんな顔して男同士でチンコしやぶるか見てみたいじゃん」

横で澄子と香織がはしゃいでいた。

午後九時の駅前繁華街外れにあるゲームセンターの中には、一見して中学生とわかる男女があたし達以外にも十人近くたむろしていた。しかし制服姿なのはあたし達だけだった。

「あんた達、あんなのがそんなに面白かったの。あたしは気持ち悪いだけだったよ。ばかばかしいわ」
はき捨てるようなあたしの言葉に、澄子はひとつため息をついてゲーム機の上においてあった缶ジュースを流し込んだ。

香織もおしゃべりを止めて周囲に視線を泳がせる。くだらない。何も面白い事なんてない。俊夫といい、雄大といい、最近の男ってなんて歯ごたえの無い連中ばかりなのろっ。

プライドって無いのだろうか。少しでも機嫌を取ろうといつも卑屈に笑っている。男だったらもっときゃきつとしろよ。

あたしの胸の毛もやもやは不完全燃焼のくすぶりだ。不完全燃焼は臭いガスを出す。有毒ガスだ。

でも、一体自分の中で何が燃えているというんだろっ。父が死んだ時に燃える物なんて何もなくなってしまうたはずなのに……。

「どうすんの。もう帰るの?」

澄子がのろのろと見上げて言う。

前歯がウサギのように突き出た澄子はいつも口が半開きだ。あんな顔の方がよっぽどオモロイよ。

口に出さずに心の中でつぶやくとあたしは二人に背を向けた。

その時、ちよつと声をかけようと近寄ってきた高校生風の男と面と向かう形になった。

とつさに一步退いて半身の体制になる。

「おつと失礼。キミたち戸城中学生? 俺達も三人なんだけど、一緒にどう?」

最近流行ってるのか丸刈りに近い短髪その男は、口と顎に無精ひげをまばらに生やしていた。によるとカイトワレ見たいに弱々しい髭先、なんとも汚らしい無精ひげだ。

「何だよ、ご機嫌斜めなのかな。彼氏にふられちゃったかな。こんなかわいい顔してるのに、怖い顔してちやもつたいないぜ」

男の手が茶色に染めてるあたしのストレートヘアにかかろうとしたとき、あたしは右膝をスムーズに持ち上げた。それは彼の股間に入っていた。

ぶつと息をはきながら無精ひげが前かがみに崩れ落ちる。椅子が転がって、周りにいた数人の客が慌てて立ち上がった。

「何しやがる」

叫んで向かってきたのは、倒れた男の連れ二人だ。狭くて足場の悪い場所での乱闘は面倒くさい。

近くのテーブルの灰皿を取り上げると、二人の顔に向けて中身をぶつ掛けてやった。

ラークやマイルドセブンの吸殻が宙に舞う。

灰と吸殻が二人の顔にかかり、動きが止まる瞬間を狙って横を通り抜け、出口に走った。澄子とかおりも慌ててあたしの後を追ってくる。

何度か人にぶつかってよろけながらも表に駆け出す。半分期待していたのに男達は誰も追って来なかった。つまらないの。

車の行き交う道路沿いでは、ハンドルを細長く伸ばしたり排気管を短く切ったりして改造をしたバイクと、濁った目をした若者たちが数人ずつのグループに分かれて道行く者達に無遠慮な視線を投げかけていた。

無視して歩く。その中の一人が口笛を吹いてきたが睨みつけてやったら、肩をすばめてそっぽを向いた。「ちよっと待ってよ、紗江子。いきなり喧嘩はないでしょう」

やっと追いついてきた澄子が肩に手を置いて言った。

不満を口にする時も、笑いを顔にへばりつかせた卑屈な言い方だった。

「あたし、もう少しで奴らにつかまりそうになったよ」

やや太目の香織は体中から噴出した汗に閉口して

るようだ。しわしわになったハンカチを取り出して額の汗をぬぐっている。

「あたしもう帰るから。あんた達まだ遊んでいくなら、また明日ね」

残った二人は不愉快そうな顔を見合わせていた。

俊夫の両親があたしに挨拶に来たのは、母に電話を入れたそのすぐ後だった。状況は警察からも聞いたのだろう。あたしがさんざん聞かれて説明した事はすでに俊夫の両親の耳にも入っているみたい。

助けてもらってありがととか、お世話になりましたとか言われちゃって、いつもはいじめてるからあたしも焦ってしまった。

けがの具合はどうなんですかと聞いたら、いや、肋骨が二本折れてるだけで、内臓の方は大丈夫みたいです。おかげさまでって背の低い俊夫の御父さんがやたら恐縮していた。

ご両親は、泊まる必要も無さそうだと、その後帰っていった。まあ、そうだろうな。命が危ないわけでもないのだから。

朝日は寝不足の目には眩しかった。部屋の窓についた水滴が光を反射してきらきら輝いていた。

「天国に来たかと思った」

窓からベッドに目を移すと、俊夫があたしと同じように目を瞬かせていた。

「大丈夫？ 痛くない？」

あたしが覗き込むと、俊夫は複雑な表情を顔に浮かべた。

いつもいじめられている不良にきわどい所を助けられるのは、確かに複雑な状況だ。

「どうして……」

俊夫はそこで言葉を切った。

「偶然通りかかったんだよ。俊夫が必死になってるのはじめて見た。あの機械がそんなに大事だったんだ」

俊夫が最近変わってきたのをあたしは思い出していた。

いつも卑屈な感じだったこの子が、昨日の朝、いじめっ子について反撃していたものね。

「ありさちゃんって、誰なの？」

何もしゃべらない俊夫に、あたしはさりげなく聞いてみた。

寂しそうな歌を歌うありさ。あの声は昨夜からあたしの気持ちに妙に圧迫している。

「聞いたのか？ あの時」

目を見開く俊夫は何を考えているのだろう。自分がそ

のつもりで受信機の周波数もセットしてたんだろくに。

「あのラジオはなんなの？ 普通のラジオじゃないよね。トランシーバーみたいな形してたし……」

「マルチバンドレシーバーって言うんだよ。広帯域受信機。ラジオの電波からテレビの電波、コードレス電話の電波やタクシー無線や警察無線が聞けるんだ。もっとも最近の警察はデジタル無線になってるから聞けなくなっちゃったけどね」

なるほど、俊夫はいじめられっ子の受信小僧だったわけだ。なんともネクラな趣味だな。あたしの表情を読んだ俊夫は少し不愉快そうに口を突き出した。

「どうせネクラな趣味だよ。他人の会話聞いて何が面白いんだって思つかもしれないけど、会話聞く事より、電波を受信する事が面白いんだ。言い訳に聞こえるかもしれないけど」

「ネクラだなんて思ってないよ。変わった趣味だとは思っただけ」

いつになく下出にでるあたしにそろそろ俊夫も不審な感じを受けてきたみたいだ。

眉間に疑問符が見える。

でも、あたしはその事には何も答えられない。もういじめるの止めるよ、なんて改まって言えるわけがな

い。だからありがたく思えよでも受け取られかねない。

「ありさの放送はどんな感じだった？」

黙り込むあたしに俊夫が聞いてきた。

「どうだったって聞かれても、困るけど。」

感じたままを言えば……。

「悲しそうだったよ。」

「いや、そうじゃなくて、きれいに聞こえた？」

「そういえば雑音であまりきれいには聞こえなかった。」

「あたしがそう言つと、俊夫はため息をついた。」

「だいぶ近くだと思つたんだけどな。それとも電池が

ますます弱くなつたかな」

「どういうこと？」

俊夫の目が一瞬きよるきよるした。何か考えてるみたい。

そしてそのあと俊夫から聞いた話は、あたしの背中を冷たく流れる汗の筋になつて、胸焼けしそうな水溜りをあたしの心の中に作つた。

「最初に聞いた時は偶然その電波を拾つただけで、子供のいたずらだと思つた。タバコの火を押し付けられて熱かつたとか、針を刺されたとか、それにしても変なはずらだと思つたよ。それが二週間前のこと」

ちようど雄大と組ませて、あたしたちがひどいことをした頃だった。

「その電波の周波数を記録しておいて、時々サーチしてただけど、二回目引つかつたのが先週の水曜日だった。内容はさらにエスカレートしていったんだ。心配になつてきた。三回目が今週の火曜日、その時、電波が徐々に弱くなつているのに気づいたんだ。多分トランシーバーの電池がなくなりつつあるんだと思つた。そして、とにかくどこからその電波が出るのか確かめるために昨夜あのあたりを探索中だった」

「そこであの三人組に絡まれたって訳だね。よし、あたしも力になるよ、無抵抗の幼児に虐待を加える親なんて最低だ。とつ捕まえてぶん殴つてやるよ」

威勢のいい台詞とは裏腹にあたしの気持ちは沈んでいった。

なぜならその最低の親と同じことをあたしは今までずいぶんやってきたのだから。

ありさを助けたいと思つ気持だが、そのまま自分を否定してしまう事につながるのだ。

最近なんとなく俊夫が変わつてきたと思つていたけど、それはありさの放送を聞いたからだったのだ。

弱いものを助けるためには自分が強くならなくてはならない。俊夫もやっとそのことに気付いたのかも知れない。

あれはつい昨日の朝のことだった。

数人の男子が俊夫を取り囲んでからかっていた。

「よお、オカマ、尻を突付かれた感じはどうだった？
気持ちよかったか？」

身体の大きな弓川武士が背の低い俊夫の顔をかがんで覗き込むように言った。

「尻を見せてみるよ。切れ痔やいぼ痔になってないか診察してやるぜ」

無視する俊夫をなおもからかうように武士は笑いかける。

武士の後ろでは別の二人が尻と腰をくつつけあつて結合の様子を演じて見せている。

あんあん、もっとー、なんて前に立って尻を突き出して田中がウラ声で騒ぎ立てていた。クラスの他の生徒達は、半数は笑いながら、それ以外は興味深げに俊夫の反応を見守っている。

俊夫の反応はいつもとは違っていた。いつもなら真っ赤になってうつむくか、笑い顔で言う事聞くかのどちらかだ。みんなの前でパンツ下げられた事も一回や二回じゃなかったはずだ。

「ああ。すごく気持ちよかったですぜ。羨ましかったら雄大に頼んでやるよ。おまえのケツも掘ってやれつてね。それとも僕がやってやるうか。武士のケツはでかいから僕のじゃ物足りないかもしれないけどね」

俊夫の声はやや上ずってはいたけど、はつきりした口調だった。

「おー」なんて、みんなの歓声が上がった。

俊夫の思いがけない反撃を受けて、武士は眼を白黒させてたづけ。そんな武士がおかしくて皆がくすくす笑った。

悔しそうにした武士が、先生の入ってくるのを横目でみとめながら、俊夫に耳打ちした言葉は、多分、「放課後おぼえてろだ」。

その放課後にどうなったのかは知らないけど、昨夕の様子では俊夫は武士を無視して帰ったんだろうな。そしてありさちゃんの探索の準備をしてたんだろう。

あたしはそんな俊夫が羨ましくなった。

誰かのために一生懸命になれるなんてすばらしい。そんな機会は、ありそうで、めったにあるものじゃない。

どうしても利害がからんじゃうからな。これをやっておいたらいつか恩返しされるとか、こいつには貸し

を作っていた方がいいとか。

そんな人助けはただの偽善だ。

偽善の人助けなんて、自分が不利になっってきたらすぐに逃げるだけなのだから。

でも俊夫は向こうを向いたまま、あたしの言葉を無視していた。

無視というより考え込んでいた。紗江子なんかが信用できるだろうか、きつとそんな風に思っているのだろうか。

もう一押ししようとした時、こっちを向いて俊夫が言った。

「じゃあ、僕の頼みもきいてくれるかな」

やっとあたしを見てくれた俊夫は、正面からあたしを見つめてきた。

「あたしも入れてくれるの？」

かくれんぼや鬼ごっこじゃないって言うのに、そんな風にしか言えなかった。

「ありさを助ける事が一番重要だからね。僕の気持ちなんか本当はどつでもいいんだ。個人的な感情を抜きにしたらオタクに手伝ってもらうのはすごく助かるし」

うんうんと頷くあたしに、俊夫は簡単にメモを書いてくれた。

「アンテナの材料……、壊されたからまた作らないと……」

「わかった。買って来るよ」

あたしはその薄っぺらいメモを受け取ると立ち上がった。

金曜の朝だ。とりあえず学校に行って、帰りにホームセンターによることにしよう。

「お母さん、今日はまだ帰ってこない。ご飯はまだかな。お菓子が残っていて良かったよ。ジュースもあつたからラッキーだよ。お母さんが帰ってこないと押入れに入らなくてもいいの。今日は涼しい所で寝れるかな。もしもし？ 誰か聞いてますか？ ありさはここに居るんだよ」

ありさの悲痛な叫び声が鮮明に聞こえてきた。改めて怒りが湧いてくる。

ありさって何歳くらいの子だろう。声を聞いた感じは幼稚園から小学二年生の間くらいだと思うけど、ひよつとしたらもう少し上かもしれない。

虐待された子って、精神的に傷ついて精神年齢が発達しにくいつて何かで読んだ記憶もあるし。どつちにしても自分がどうして痛い事されるのか理解できないままで、殴られたりつねられたり、針を刺されたり、

ひどい事され続けなのだ。

小さな手足にたくさんの切り傷やあざを蓄えたありさは必死の思いで電波を出しつづけてるんだろう。

誰かに助けてもらえると信じてるのか、それとも絶望の中であがく手が偶然それをつかんだのか。

怒りと同時に気分が一気に鬱になる。あたしだって似たような事やってたんだから。最低の人間なのだから。

とにかく、今はありさを助けてあげたい。

その事だけを考える事にしようと思う。

あたしは俊夫に教わったとおり、アンテナで電波を探しながら、暗い団地内を行ったり来たりしていた。なかなか思うように行かない。

いろんな障害物が周囲に立ち並んでいるから、電波は一直線に飛べないのだ。だから探知するのも一苦労する。

病院のベッドであたしが買ってきた材料から俊夫が作ったアンテナはなかなか優秀だけど、それを扱うあたしの知識が追いついてないんだ。きつと。

うろろろするだけで、ありさの居場所を探ることなど全然無理のようだ。

病室での俊夫の諦め顔が思い出される。

「まいったよ。退院は来週だなんて。一週間も足止め食らったらありさを助けることなんて出来なくなる」

あたしが買っていった材料を弱々しい笑顔で受け取った時の俊夫の言葉だ。

「どうして？　ありさちゃんが死にそうなの？　退院してからだつて探せるでしょ」

俊夫が首を振る。

「言わなかったかな。ありさのトランシーバーはもう電池が切れそうなんだ。あの子に電池を換えることなんてできっこない。第一親の見様見真似でやっているだけで、本当に電波が出ているかもわかってないと思う」

「毎日放送してるのかしら」

「毎日じゃないみたいだけど、別に決まりなんて何も無いし、昼間だつて親のいない時にやってるかもしれない」

俊夫は本当に悔しそうだった。泣きそうなくらいにしていた。

その時、病室のドアが開いて、男子が一人入ってきた。

雄大だった。雄大はあたしがいるのを見て驚いて、うつむきもじもじしていた。

「雄大、見舞いに来てくれたのか、ありがと」

俊夫が雄大を招き入れる。雄大は持っていたポツカの缶コーヒを二本ベッドサイドのテーブルに置いた。

あたしは決まり悪くてすっかり困ってしまった。

でも、言うべきことは言わなければいけない。自分が変わるためには傷つくことを恐れてはいけけないのだ。

「雄大、この前は、ごめん。もういじめないから。許してなんて言わないけど、もういじめないから……」

あたしは雄大の顔をちらりと横目で見ながら出来るだけはつきり言った。

雄大の眼が見開かれ、輝いた。その嬉しそうな顔に、あたしも雄大の方をまっすぐ向いた。でも、次の瞬間、雄大は顔を真っ赤にして怒り出した。

「ふざけるなよ。俺がどれだけ苦しんだと思ってるんだよ。好きなだけ人を辱めておいて、飽きたらもうやめるから許してかよ」

唇がぶるぶる震えていた。輝いていたと思った眼からは、大粒の涙がぼろぼろこぼれだした。

「ごめん。殴っていいよ」

あたしは雄大が殴りやすい位置に移った。

雄大の右手がすつと上がったのを見て、歯を食いしばる。

でも持ち上がった手はゆっくり下ろされた。

「冗談じゃない。一発殴ってチャラになんかしてやるもんか。ずっと恨んでやるから」

雄大は涙を拭きながら出て行った。

そうだろうな。当然だ。俊夫だって本当は雄大と同じように思っているはずなんだ。

俊夫を見ると、厳しい表情で唇をかんでいた。

二人ともそのあと二十分くらいは黙ったままだった。

俊夫は何か言いたげだったが、無理やり言葉を飲み込んでいたみたいだった。さっきまで何の話だったっけ。そうだ。ありさちゃんの事だった。

「いつそのこと警察に言ってみたら？」

思い切ってあたしが話を戻した。

「だめだよ。何の証拠も無いし、声を録音さえしていないんじゃないさ」

俊夫が一つ咳をしてから言う。

「じゃあ、俊夫の代わりにあたしが追ってみるよ。やり方教えてよ」

正直言って本当に俊夫がやらせてくれるなんて思ってたなかった。

そんな信用してくれるわけ無いと思っていたか

ら。というか、自分のやりがいのある仕事を譲ってくれるなんて思えなかったから。

でも、俊夫はすんなりやり方を教えてくれた。今までずっとあたしからいじめられていたというのに。あたしを許してくれたのかな。そんな樂觀論が頭をもたげる。

「ありがとう。でも、あたしの事許してくれたとは思ってないから」

あたしは、許すよという言葉を半分以上期待しながらそう言ってみただけ、俊夫はいまいにうなずくだけだった。

人を許すのはそう簡単じゃないって事だ。

しかしこれも難しい。

電波が強くなったと思つて喜んでそっちに走っていくと、とたんにレベルメーターのブロックが消えていく。あちこちに立っている六階建てのアパートが屏風のように立ち並び団地内では発信地を素人が探し出すなんて不可能なんだ。

その時、あたしの携帯電話のベルがなった。

俊夫からだった。低い扉に腰掛けて、あたしは携帯を取り出した。

「どう？ 電波受信できた？」

ひそめた俊夫の声は、心配そうに聞いてきた。

「うん。受信はできてるんだけど、方向がよくわからないのよ」

「おかしいな。アンテナの作り方がまずかったのかな」

「わかんないけど、感度のいい方向に歩いてても、すぐに切れたりして一定しないのよ」

「そうか。その辺、障害物が多そうだからな。わかった、明日ジープとTシャツ持ってきてくれるかな」

明日の夜は僕も一緒にいくから」

「病院抜け出すつもり？ 大胆だね、でも身体はいいの？」

「もつどつて事ないよ」

そういうやり取りをした後、電話は切れた。ジープとTシャツか。あたしのでいいかな。まあ何とか着られるでしょう。

土曜日。予定通りに病院を抜け出した俊夫とあたしは、団地の公園で九時過ぎからありさの放送を受信するために待機した。

九時半、十時半、そして十一時まで待ってみただけ、その夜はありさの放送局はお休みだった。

「放送がお休みという事は親が家にいるって事かし

ら」

あたしが言つと俊夫がうなずいた。

「そうだね。昼間は親がいるからできなくて、夜親のいないときにやっているのかもしれない。普通は逆のはずだけだね。親は夜勤の仕事しているか……それともパチンコかな」

「パチンコつて案外当たっているかもしれないね」

子供をほつぱりだして親がする事といえればそれが真つ先に思い浮かんでくる。

親がパチンコで遊んでいる間、ありさは悲痛な声を夜の空気に発射しつづけているのだからと。重苦しい雰囲気があたし達を包む。

「でも、松本と一緒にだと不良にからまれる心配がないから本当に楽だね」

俊夫のその言葉だけが、その夜のあたしの収穫だった。

日曜の朝。携帯を見たら澄子からメールが来ていた。『おい。最近何してんの、駅前で遊ぼうよ。俊夫は入院中だから雄大でも拉致してやんない?』
今までずつとつるんで遊んでいた仲間だと思つと、なんとも鬱な気分になる。

もつ自己嫌悪するのは嫌やなんだ、あたしは。

金輪際あんた達とは付き合わないから、というメールを送つて、あたしはベッドに再び寝転んだ。巢立つたばかりのツバメ達が窓の外でうるさくさえずっていた。

「さんざんあたしたちを利用しておいで、何よこれ。自分だけいい子になろうつての?」冗談じゃないわよ」

澄子の言葉は、もつあんたたちとは付き合わないから、というメールに対する言葉だった。利用していたのはむしろあんたたちの方でしょ、と言いたかつたけどやめた。ここで言い争いしても始まらない。

午後五時の公園はやつと少しだけ日が斜めになつただけで、まだ暑くてたまらない。

ここには澄子のメールで呼び出された。どうせ落とし前をつけるなんていうのだ。

まるでやくざみたい。

澄子と香織の他に、短髪にサングラス男と、黒の短パン男が待っていた。

気の早いせみの声があたりに湧き上がる。

まだ梅雨も終わっていないのに、ほんの少し晴れ間が続いただけで、彼らは勢いよく夏に向かって走り出すのだ。

「落とし前つてどうするつもり？ 小指でも落とすの？ やくざみたいね」

含み笑いをこらえて言う。

「あんたのそう言うところが気に入らないのよ。ちょっとばかり強いからって偉そうに。でも今日はあんたがやられる番だからね。この二人にかわいがって貰うんだから」

香織が憎々しげにメガネをずり上げると、それが合図でもあったかのように横にいた一人の男たちから殺気が漂ってきた。

二人は武道の心得があるようだった。

前と後ろにすばやく回りこむと、笑みを浮かべながら彼らは襲い掛かってきた。

前面のサングラス男が前蹴りから正拳突きのコンビネーションで攻め立てる。

周囲に人影はない。さつきまで犬の散歩などをしていた人たちも、不穏な空気を感じたのか早々と立ち去っていた。

防戦一方だ。一人だけなら何とかなるけど、もう一人がフォローしている中で一人に集中して攻撃したら、あとの一人の男に致命的な隙を与えることになる。すばやく動いて木立を背にした。サングラス男の回

しげりをおかして、その隙の出来た左ひざ内側をつま先でえぐってやる。倒れる男のしかめた顔面に膝を入れようとした時、短髪男にタックルを受けた。太い腕が巻きついて、もがいてももがいても、絡みつく蜘蛛の糸のようにあたしの自由を奪い取る。

立ち上がったサングラス男の拳をみぞおちに受けたとき、負けを確信した。走りよった澄子たちに手首を縛られた。

抱えられて木立の中に連れ込まれるあたしの頭の中では、一昨日の夜聞いたありさのかすれた歌声が聞こえ始めた。

「何だあんた、生理中だったの」

押さえつけられたあたしの足元で下着を剥ぎ取った香織の目の前に、抜けた紐が写ったのだ。香織は面白そうにあたしの足の間からひよろりと出てる紐を軽く引つ張る。

「くっさー。これじゃ彼氏達がかわいそうだね」

澄子はあたしの股間の毛をわしづかみにすると思いつき引つ張った。

ぶちぶちいう音と共に、刺すような痛みが襲い掛かる。

でも羞恥心の方が強いから痛みはそれほど気にな

らなかった。

「うへー。こんなの初めて見たぜ。俺に引っこ抜かせろよ」

短パン男が太い腕を下ろしてきた。

「お、結構抵抗あるね。締まりいいじゃん」

短パン男は楽しむように紐をゆるゆる引つ張る。たつぱり時間をかけていたぶるつもりのようだ。芝生に押さえ込まれた顔を横に向けて、見回してみた。

遠くに人影が見えたけど、すぐにいなくなる。

誰も助けようとなんかしないのだ。下手して火の粉がかかってきたらばかみたい、そんな風に考えるのが今の世の中当たり前なのだ。

足を広げさせられて、四人に見下ろされながら真っ赤なそれは引き抜かれた。

頭の中が溶鉱炉のように火を噴いている。

思えば俊夫もあの時こんな感じを受けていたのだ。

「さつさとやる事やんなよ……」

あたしの声はふるえていた。怒りと屈辱に……。全然平気に声を出せると思っていたのに、悔しかった。

こんな最低の自分にはちょうどいい成り行きのはずなのに。

涙を見られるのが一番悲しかった。

「ふふふ、この写真俊夫にも送ってやるうっと。君の仇はあたしらが討つてやったよなんてね」

香織の手には、最新型のカメラつき携帯電話が握られていた。

そういえばあの最中に変なシャッター音が聞こえていたっけ。

あたしはもうどうでも良かった。自分がどうなるうが知ったことじゃない。

今はありさを助けただけ。あたしは必死でそう考えていた。

「でも、ありさちゃんが見つかったらどうするの？」

俊夫はもうあたしがレイプされている写真を見たのだろうか。

なんとなくそれまでと雰囲気が変わったから、多分もう見ているんだろうな。

でもあたしは知らない振りをすることにした。両方とも知っているなんてなったら、気まずくてまともにしゃべれない。

無理やりありさ探索の話題を進めた。

見つかつたらどうするか、これは結構重要な問題だ。そのまま家に乗り込んでいって虐待止めるなんて言っても始まらない。

親子の問題はあたし達みたいながきではどうする事もできない。

ちゃんとした大人の第三者に解決してもらおう以外ないのだ。

「とりあえず家がわかれば、警察や人権擁護なんとかに連絡したりしてどうにかなるんじゃないかな」

俊夫の答えも歯切れが悪い。警察に相談するのなら何か証拠があるんじゃないの？

でもテープレコーダーの準備なんかしていないし……。

俊夫の着ているあたしのTシャツはちょうど良かったけど、ジーンズは太腿が苦しそうだ。ヒップはだぶだぶなのに、ウエストは窮屈。

なんだかあたしがよっぽどの尻デカ女みたいだ。昨日と同じように二人で団地の公園に来ていた。

運の悪い事に今夜は小雨がぱらついていて。俊夫は受信機を透明のビニールで包んで、防水加工している。

「雨は電波が弱まるからなあ。ますます望み薄だ」
透明なビニール傘の中で俊夫の首が弱々しくうなだれた。

かと思うと、ぶすつと黙って何か考え込んでいる。昨夜と比べても雰囲気悪い。

俊夫のあたしに対する複雑な気持ちと、ありさを心

配する気持ちがその沈黙の中で渦を巻いているように思える。

九時半になった。

「そうだ。ここに居るより、あそこの上に登ってみよう。その方が電波も受けやすいはずだ」

俊夫が立ち上がった、丘の上の住宅地を指差した。

この辺りと比べて、土地も広く取った一戸建ての外観のきれいな住宅が立ち並んでいる住宅地だ。

あたし達は汗と雨でじっとり湿ったジーンズを無理やり動かして、そこまでの道のりを歩いた。

団地の周辺と比べて、街灯が多くて明るい町並みだ。受信機の電源はずっとオンにしているから、雨の中で微かな雑音が二人を包んでいる。

ありさを見つけた。そして助けてあげたい。それはあたし自身の罪の償いとかがじゃなくて、心の底から願っている事だった。

そして俊夫も同じ気持ちなのが嬉しかった。時折弱音を吐くし、そんな時は昔の俊夫が顔を出すけど、自分自身で気持ちを奮い立たせようとしているのが頼もしい。

十時になった。ありさの放送があるとしたら、もうすぐのはずだ。

俊夫は魚の骨のような八木アンテナを持ってゆくりと自転するようにして電波を探している。時折雑音の質が変わるだけで、まだありさの放送は受信できない。

「君たち、そこで何してるんだ」

声ができるまで全く気付かなかった。懐中電灯を持った二人組みの男は、青い制服を着てこっぴど体つきをしていた。警察官だ。

やばい。今補導されるのは困る。

俊夫に目配せをして、あたしは走り出した。邪魔になる傘も放り投げて。

俊夫もすぐ後をついて来るが、時折、痛つとか声が漏れていた。折れた二本の肋骨はまだきつちりくつちりしていないのだ。

これじゃ警官を振り切るのは無理かもしれない。いったん階段を駆け下りて、右に曲がり、再び急坂を登る。

待ちなさいって言いながら警察官もしつこく追ってくる。

「僕はもう駄目だ。松本、これもって行ってくれ」

俊夫が受信機とアンテナをあたしに渡そうとする。

「傷が痛むの？」

「いや、傷の方はそれほどでもないけど、運動不足が

たたつてる……」

「しつかりしてよ。ありさちゃんのためなんだから」

いっそのこと抱えて走りたいくらいだったけど、いくら俊夫が貧弱な体つきとはいっても四十キログラム以上はある筈だから無理というものだ。

あたしは目の端に写った雑草だらけの造成地に俊夫を引っ張っていった。

その丈高い雑草の中に服が濡れるのもかまわず身を伏せる。

水溜りが冷たくて、気持ち悪い。

いてて、と腹ばいになった俊夫があげる声にひやりとしたけど、警察官の持った懐中電灯の光は揺れながら通り過ぎていく。

まったく、ありさちゃんも見つからないのに、補導だけされるんじゃ割に合わないってもんだ。

時計を見ると十時二十分になっていた。

「ひよつとしたら聞き逃したかもしれないな。何でこいつも邪魔が入るんだらう、正しい事をしているはずなのに……」

俊夫も勘違いしているみたいだ。

「神様なんかいないってことだよ。その点はあきらめるんだね」

あたしはもつずっと何年も前に気付いていた事な

んだから。

天使の歌声が聞こえてきたのはその時だった。『鳩ぼつぼ』の歌が雨の降る黒い空からくつきりとした輪郭を持って、あたしと俊夫の間に舞い降りてくる。ありさの放送だ。この近くなんだ。こんなにくつきりと聞こえるなんて。

いったん遠ざかった警察官の足音が、急いで引き返してきた。

「そこに隠れてるんだろ。おとなしく出てきなさい」
思ったより若い声が道路の方から聞こえてくる。

「あの家だ。あそこから電波が発射してくる」

俊夫が示した家は新興住宅地の角に建った、クリーム色の外壁で出窓の多い家だった。

後一步といつところなのに、ここで補導されるのじや、何のためにありさちゃんを追ってきたのかわからない。どうしたらいい？

俊夫に聞いても俊夫も答えに詰まったままだった。

『ありさの晩御飯はまだかなあ、お父さんたちはまだ帰ってきません。玉がたくさん出て景品がたくさんもらえたら、ありさにもお菓子をもらえるんだだけだなあ』

そんな声がしていたと思ったら、急に悲鳴に変わった。

た。

『こらあ、おまえ親のものを勝手に使って何してるんだ』

そして電波が途切れる。ちょうど今両親が帰ってきたところのようだ。

あたしはもう俊夫に相談しなかった。体が勝手に動いたって感じだった。

びしょ濡れのまま立ち上がると、体の大きな警官は一瞬身構えた。

しかし、次の瞬間あたしが女だと悟ると、油断が顔をのぞかせた。

「君たち、ちよつと」

言いながら近寄る警官の股間に膝を突き入れる。こらあという怒声を後ろに聞きながらあたしは走り出した。

空き地の入り口に立っていた警官は腕を払ってから膝の裏を軽くけつて転ばせてやる。

そしてありさの元へ向かった。建物の階段を駆け上がり、玄関のドアを引き開けた。

ドアに鍵はかかっていなかった。

家の中に入ると同時にありさの行動を認めた親が、鍵をかけるのを忘れたのだろう。

何だおまえはという父親は短髪のパーマで、縦縞の

上着を着ていた。

その右手が幼稚園児の足をつかんで中釣りにしている。園児の右手には黄色いトランシーバーが握られていた。

硬くこぶしを握り締めると、あたしはその男の顔面に力いっぱいお見舞いしてやった。

なにすんのよあんた、そついう母親にも平手でびんたを食らわせる。

彼女はくるくると二回転してソファに倒れこんだ。

あたしの後に踏み込んできた俊夫が、泣きじゃくるありさちゃんを抱きしめた。

ありさちゃんには何がどうなっているのかわからないのだろう。

彼女にとつて見れば、自分と両親の住むこの家が唯一の世界だったのに、そこに侵入者がいきなり入り込んできて両親をぶつ飛ばしてしまった。

そんな風に見えただろう。

「ありさちゃん、君の声を聞いて助けに来たんだよ」
俊夫が言うけど、ありさちゃんはいくつも痣をつけた青白い顔を振るだけだった。

やせこけた子だった。何日もお風呂に入れてもらっていないのか、髪も脂ぎっていた。

その後で入ってきた警察官にも、ありさちゃんが普

通の状態じゃないというのが、ありありとわかるほどだった。

その後のことはよく覚えていない。

警察による事情聴取や、なんだかんだで二週間はバタバタだった。

マスコミにも取り上げられて、二人でニュース番組のインタビュウにも駆り出された。

よくやったつて誉めてくれる人もいたし、もっと早く警察が人権擁護委員会に言ってくれたほうがよかつたとたしなめられる事もあった。

そんなことがあつて長かった一学期の最終日、駅から遠回りで川沿いの道を歩いていると、後ろから走ってくる足音が聞こえた。

振り向くと、俊夫だった。

「やあ、まったく……大変だったよな」

あたしより五センチは背が低い俊夫だけど、ぐっと胸をそらした俊夫はずっと大きく見えた。

「警官殴り飛ばすんだもんなあ、紗江子にはまいるよ」

「何が言いたいなのよ」

俊夫はかばんを持ち帰ると、「あの時、紗江子は言

「つたよね、神様がいると思うのは間違いだって」

「そういえばそんなことも言ったかな。」

「でもさ。僕は確信したよ。やっぱりいるってね」

「どうして？」

「あの家の鍵が開いていたときにさ。普通家に帰ったら誰だって鍵ぐらい閉めるだろ。それに先に家に入ったのが父親で、母親が後から入ったのなら母親が閉めたはずだ」

確かに、あの時扉の鍵が閉まっていたらまったく違った展開になっていただろう。

「ありさちゃんを救うことなんてできなくて、私達はあっけなく補導されてきついお仕置きが待っていただろう。公務執行妨害に家宅侵入罪（これは庭に入っただけでも適用される）、ついでに不純異性交遊のおまけまでついたかもしれない。」

そしてありさちゃんは、これからも長い間孤独で苦痛の日々を過ごすことなくはならなかっただろう。

「それにあそこで警官に補導されそうになったことも、結果的には良かったじゃないか」

「まあ、どう思おうと個人の自由よ、私には関係ない」
わざわざ走って追いかけてきてまで言うことかしら。

土手の下を流れる川の照り返しがまぶしくて私は

車道の方に目を向けた。

真つ黒い排気ガスをたくさん吐き出しながら横腹に安全運転と大書きした青いダンプカーが通り過ぎていく。

「雄大はあんな事言っていたけど……僕は紗江子を許すよ」

思いがけない言葉に驚いて俊夫を見ると、照り返しの光を浴びた俊夫の笑顔は、ずっと以前大好きだった人のそれにそっくりだった。

涙が出そうになるのを必死でこらえる。

胸が詰まってしまって、ありがとつという言葉さえでてこない。

やっとひとつだけ、私は父に許してもらったのかも知れなかった。

ありさの放送局

おわり

